

書名： **地方消滅**

編著者： **増田寛也**

出版社：中央公論新社

出版年月：2014年8月

総ページ数：243ページ

ISBN：9784121022820



推薦者

畠山輝雄

鳴門教育大学大学院准教授

社会系コース

『地方消滅』。衝撃的なタイトルである。本書は、元岩手県知事・総務大臣の増田寛也氏が日本創生会議・人口減少問題検討分科会での議論を基に執筆したものである。本書では、日本の少子化および地方から大都市圏への人口移動を踏まえ、今後も人口移動が収束しなかった場合に、2010～2040年までの30年間に、「20～39歳の女性人口」が5割以下に減少する市区町村を「消滅可能性都市」とし、これにあたる自治体が896自治体(49.8%)存在することを示した。また、この消滅可能性都市をリスト化し、実名で巻末に示した。増田氏によると、これらの自治体では、将来急激な人口減少に遭遇し消滅する可能性があるという。

この地方消滅に関しては、消滅可能性都市と名指しされた自治体を中心に大きな衝撃が走り、「このままではいけない」と奮起する地域がある一方、「仕方がない」という諦め感が漂っている地域があるとも言われている。また、本書における分析の枠組みや対応策などに対しては賛否両論があり、批判的な論評も多くみられる。代表的なものとしては、山下祐介著『地方消滅の罨―「増田レポート」と人口減少社会の正体』(ちくま新書)や小田切徳美著『農山村は消滅しない』(岩波新書)などがあり、あわせて読むことで日本全体および地方における人口減少についてさまざまな角度から考えることができる。

以上のように、賛否両論がある本書であるが、人口減少対策で述べられていることが、その後政策化されている事例が多くあり(例えば、地方都市のコンパクトシティ化など)、また日本創生会議でその後議論された内容が政策化された事例もあるため(高齢者の地方移住など)、本書の記述はわが国の将来を考える上で、無視できないような状況となっている。

このため、日本の将来を担う若者にはぜひとも読んでいただきたい書である。また、批判的論評も併せて読むことで、日本の将来について自分なりの考えを持ち、将来教員になった際に子どもたちに伝えてほしい。

